あしぶえ

1年間の活動報告

2010（H22）年度

ASHIBUE®
あしぶえ

目次

＜目　次＞

ごあいさつ 3

あしぶえの目指すもの 4

ロゴマーク 5

演劇を人々の暮らしの中へ 6

組織図 7

2010（H22）年度事業報告

① 演劇公演の制作と上演 8

② 表現・コミュニケーション能力育成のための事業 12

③ しいの実シアターの管理・運営事業 16

④ 八雲国際演劇祭の運営に関わる事業 20

サポート会の活動 26

法人全体の運営 27

2010（H22）年度決算報告 28

あしぶえの活動概要 30

新聞記事 31

「しいの実シアターとあしぶえの取り組み」 35

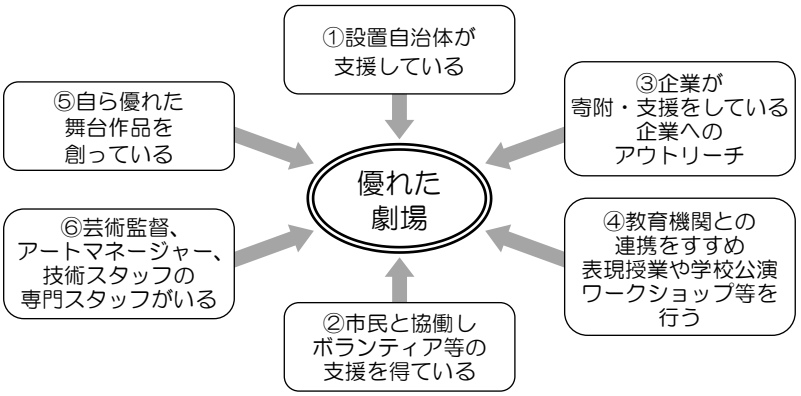
＜ごあいさつ＞

この度の東日本大震災は、地震、津波、原発事故と未曾有の大災害となり
世界中の人が心を痛める出来事となりました。被害を受けられた皆様、
また、被災地に所縁のある皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。
そして、1日も早い復興をお祈りいたします。

正会員の皆さまには、あしぶえの活動につきまして、いつも並々ならぬご支援とご協力を賜りまして誠にありがとうございます。心より厚くお礼申し上げます。

さて、「しいの実シアター」を中心とした各事業を更にブラッシュアップさせるため、文化庁の22年度募集である「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」に応募いたしましたところ、幸運にも採択され5年間の支援を受けることになりました。わずか100席の小さな劇場としては全国でも異例のことでした。

文化庁が採択した「優れた劇場」の条件は、①劇場の設置者である松江市が強力にバックアップしていること ②地域の人々の支援があること ③地元企業の支援があること ④学校等の教育機関と連携していること ⑤自ら優れた舞台作品を創っていること ⑥劇場にアートマネジメントの専門家と舞台技術者が常勤していること、の6つです。



採択された事業の中で、2010年度に一番規模の大きかった事業は「第4回八雲国際演劇祭」の開催でした。もう一つは、演劇作品の「セロ弾きのゴーシュ」を創り直し、ユニバーサルバージョンとして上演したことでした。これらの事業を筆頭にさまざまな取り組みを次ページから記述しておりますので、どうぞご覧ください。そして、忌憚のないご意見ご感想ご指導をお願いいたします。

2011年5月15日

特定非営利活動法人 あしぶえ
理事長　園山　土筆

＜あしぶえの目指すもの＞

「特定非営利活動法人あしぶえ」は、

あらゆる人々を対象として、

演劇の公演や演劇教育に関わる事業を行います。

また、地域と連携して

国内外の演劇に関わる人々との交流を促進することによって、

演劇によるまちづくりを目指し、

これらの活動を通して「演劇」の普及、発展、向上に寄与し、

芸術文化による心豊かな社会づくりを目指します。

＜ロゴマーク＞

国際的にも通用するように、団体名を筆文字のアルファベットで表現しました。

アクティブな「葦の妖精」が、背中を出し、力いっぱい頬をふくらませて、

広い世界に向って草笛を吹きならしているさまを描いています。

エンブレム（紋章）

ご存知ですか
他にも、こんな楽しい妖精くんたちがいることを･･･

しいの実シアターの入口では
石像の妖精くんがお出迎え。
お尻をなでると願いが叶うとか･･･

「やぁ！」

「見て！」

走る妖精くん

「ようこそ！」

＜演劇を人々の暮らしの中へ＞

「演劇」は、
人間の生きる姿を、生で表現し、
笑いと涙と感動を誘い、人々に生きる活力を与えます。

また、「演劇」は、
「感性・想像力・創造性」を涵養（かんよう）する要素をもっており、
劇づくりやワークショップを通して、
「表現力」や「コミュニケーション力」を向上させ、
これらの活動から生まれるクリエイティヴな「発想力」や「洞察力」は、
社会のあらゆる分野で役立っていくものと思います。

1998（H10）年から取り組んでいる「八雲国際演劇祭」は、
観客、ボランティアスタッフ、ホストファミリー、地域の人々など関わる人たちにとって、
多様な文化に接する貴重な体験であり、
国際的に通用するやり方で、「企画」「準備」「運営」「振り返り」を継続すれば
21世紀にふさわしい＜人づくり・まちづくり＞に発展するでしょう。

また、あしぶえが指定管理者となっている
「しいの実シアター」では、
地元はもとより、全国から幅広い年齢層のお客さまをお迎えして、
心に響く作品を提供します。
そして、公演のないときは、
訪れる人たちの「交流の場」となるよう育ててまいります。

これらの活動を推し進めることで、
演劇がもつさまざまな力が、人々の暮らしの中に広がり、
創造的な市民社会の形成に役立つものと思います。

このように考えて、1966（S41）年12月に生まれた「劇団あしぶえ」は、
2005（H17）年12月、「特定非営利活動法人あしぶえ」となり、
次の4つの柱を立てて、活動を進めています。

① 演劇公演の制作と上演

② 表現・コミュニケーション能力育成のための事業

③ しいの実シアターの管理・運営事業

④ 八雲国際演劇祭の運営に関わる事業

以上の「4つの柱」を支えるための活動もあります。

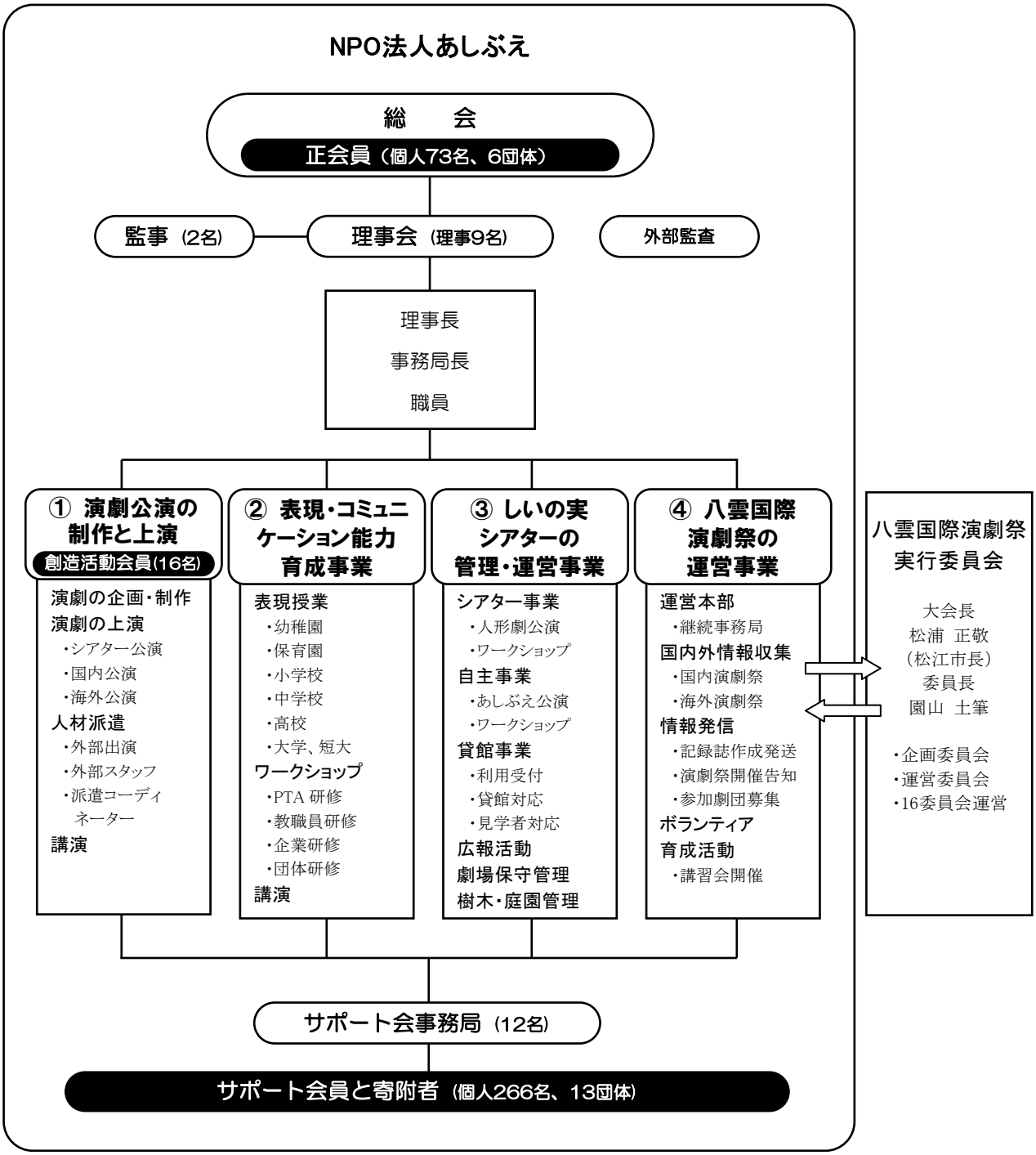
サポート会の活動

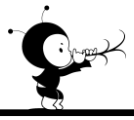
法人全体の運営

これら、6つの活動について、報告いたします。

＜組織図＞

2011年3月31日現在





① 演劇公演の制作と上演

この事業の目標	演劇を多くの人に

社会の現状

「演劇」は、観客の心をゆさぶり、生きる希望を与えてくれます。また、疲れた心を癒し、明日への活力を生み出します。そして、度重なる観劇体験は、感性や想像力、創造性を育み、物事の本質を見抜く洞察力が涵養される貴重な機会でもあります。

しかし、近年、経済の悪化により生活に余裕がなくなり、「演劇」に触れる機会はどんどん減っています。また、目や耳が不自由なため、観劇そのものの機会のない人たちもいます。

対　策

あしぶえでは、あらゆる人々に演劇を提供することを使命としています。

「セロ弾きのゴーシュ」は、20年以上上演を続けてきましたが、新しい時代に即した作り変えが必要になってきました。

そこで、「第4回八雲国際演劇祭」での上演を機会に、舞台装置、音楽、衣裳等を作り変え、目や耳の不自由な人はもちろん、日本語のわからない人にも喜んでもらえるよう、新演出を試みました。

そして、誰でも観劇できるよう無料モニター公演を行い、生まれ変わった「ゴーシュ」に対する感想を集計しました。この結果をもとにさらにレベルアップさせていきます。

2010(H22)年度の活動は次のとおりです。

詳 が付いている活動については、次ページ以降に記載しています。

		実施日時	実施場所	従事者の人数	受益者の人数
①あしぶえの公演ほか					
上演 詳	「セロ弾きのゴーシュ」 ユニバーサルバージョン モニター公演	H22/10/3	松江市 しいの実シアター	30名	179名
上演 詳	まつえ市民大学 貸切公演「セロ弾きのゴーシュ」ユニバーサルバージョン	H22/10/3	松江市 しいの実シアター	30名	90名
上演 詳	第4回八雲国際演劇祭 特別公演「セロ弾きのゴーシュ」ユニバーサルバージョン	H22/11/3	松江市 アルバホール	約50名	465名
稽古公開	「セロ弾きのゴーシュ」稽古公開	年度期間中	松江市 しいの実シアター	延べ約200名	224名
②スタッフ活動					
スタッフ業務	ホーランエンヤ馬潟地区顔師 (薬師寺全国大会)	H22/10/3	松江市馬潟地区	1名	不特定多数
スタッフ業務	ハンバートハンバートコンサート 「さすらい歳時記」師走の松江編	H22/12/11、12	松江市 しいの実シアター	4名	260名
スタッフ業務	松江地区高校演劇部合同公演	H23/3/18～20	松江市 しいの実シアター	1名	120名
③外部の仕事					
出演派遣	松江市広報番組 消費者みまもり情報「こげなときどげすーだー」(消費生活相談室)	H22/4～H23/3 (12回)	山陰ケーブルビジョン マーブルにて放送	30名	不特定多数
出演	2010・プラバクリスマスイルミネーション・日本ハンガリー協会松江支部設立1周年記念	H22/12/15	松江市 プラバホール	3名	約200名
出演	出雲芸術アカデミー音楽院 第6回ファミリーコンサート音楽劇ラララッツ	H23/1/22	出雲市 大社プレイスうらら館	1名	約400名
パネラー	NPO活動推進自治体フォーラム島根大会 パネルディスカッションパネラー	H22/11/18	島根県民会館	1名	約300名
講演	松江市幼稚園PTA研修大会 松江市幼稚園教育振興大会	H22/12/2	くにびきメッセ (松江市)	1名	138名
講演	東出雲町消費者問題研究会「エピソードから見えてくる心豊かな地域の暮らし」	H23/2/26	東出雲町民会館	1名	約150名
ラジオ出演	NHKラジオ「おはよう中国」	H22/4～H23/3 (11回)	NHK広島放送局	1名	不特定多数

新しくなった「セロ弾きのゴーシュ」

「あしぶえ★金星音楽団」による録音風景

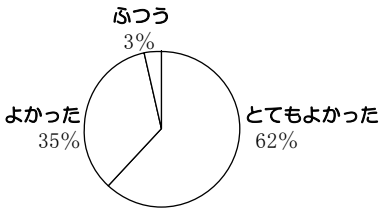
「セロ弾きのゴーシュ」ユニバーサルバージョンの上演

20年間に135回上演し、延べ27,000人を超える観客に観ていただいた「セロ弾きのゴーシュ」を「ユニバーサルバージョン」に創り変える。
言葉（日本語）のわからない人たちや、目や耳に障がいを持つ人たちにも楽しんでもらえるような作品に仕上げ、観客の幅や層を大きく拡げるような舞台を目指す。

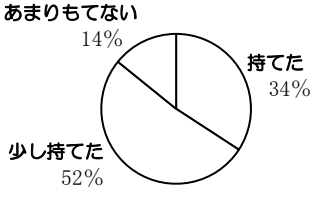
実施項目	現状	対策
「ユニバーサルバージョン」の制作 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業	6つの国際賞を受賞している「セロ弾きのゴーシュ」だが、新しい創造感覚を取り入れる必要性が出てきた。 また、今まであまり演劇を観たことの無い人でも喜んでもらえる作品にして、観客を増やしていく。	作品の演出、舞台装置、衣裳、照明、音楽を一新する。国際演劇祭上演作品でもあるので、日本語のわからない英語圏の人たちにも理解してもらえるような「ユニバーサルバージョン」として、より芸術性の高い作品に作り直した。英語字幕を日本語字幕に変更すれば、耳の不自由な人や高齢者にも対応できる作品となった。
無料モニター公演の実施 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業	新しい感覚の作品に創りなおす必要性が出てきたことに加えて、演劇祭のボランティアスタッフは、会期中に観劇することが難しいため、なんとか、観劇機会を創りたかった。	観客モニターとして、アンケートによる作品調査を行い、新しい「ゴーシュ」に反映させて完成度を高める。また演劇祭のボランティアにも観劇してもらい、事前に演劇祭の雰囲気を感じ、開催時の観客への対応やホスピタリティとつなげて、観客に「より親しみやすさ」を感じてもらう。
まつえ市民大学団体貸切公演の実施 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業	まつえ市民大学から今年度も団体観劇したいとの要望があった。受講生はあまり演劇を見慣れていない人が多いので、作品解説も必要。	一般市民の高齢者モニターとして観劇とアンケート調査を行い、作品づくりに反映していく。また観劇後、演出の園山土筆が「アフタースピーチ」により、作品や舞台、演劇の解説を行い、一般市民への演劇普及も行う。
「第4回八雲国際演劇祭」特別公演で上演 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業	国際演劇祭の主催劇団として、創りなおした「ゴーシュ」を上演し、開会式を盛り上げる。 「NPO法人プロジェクトゆうあい」から、耳に障がいのある人も観劇したいとの要望があった。	アルバホールでの「特別公演」として上演し、英語の字幕を付けて、日本語のわからない外国人にも楽しんでもらった。日本人と海外の人との反応の違いや理解度の差なども研究し、今後の作品づくりに取り入れていく。 また、NPO法人プロジェクトゆうあいの協力を得て、耳に障がいのある観客を対象に、小型ゲーム機を使って日本語のセリフを表示し、作品理解を深めてもらった。

アンケートの集計結果（無料モニター公演およびまつえ市民大学公演分）

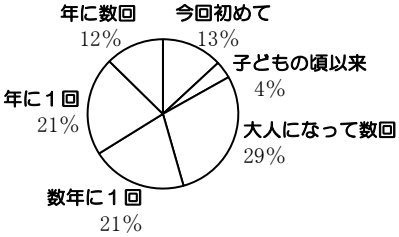
Q．今回の公演の感想



Q．今回の「ゴーシュ」を観て演劇に親しみが持てましたか

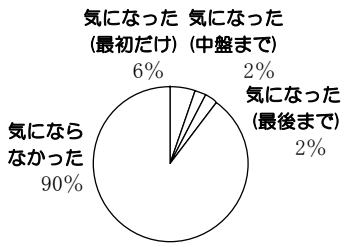


Q．普段、演劇を観に行きますか

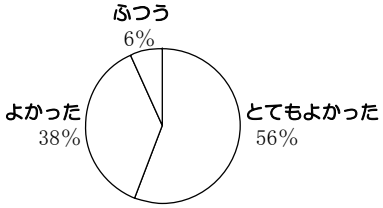


効果・成果	今後の方針・課題
舞台装置を内山勉氏、衣裳を森田雅子氏、照明を稲田道則氏にそれぞれ「ユニバーサルバージョン」として一新してもらった。特に作品の要となる音楽については、松江在住のツィンバロン奏者・斉藤浩氏に、劇中で使用する全曲の作曲・編曲を依頼、国内で活躍中の8名の演奏家に演奏してもらい、より作品の完成度をあげることができた。ユニバーサルバージョンとしての字幕については、舞台装置の中に映写することで、アンケートの結果、9割の人が気にならなかったようである。	2011（平成23）年度は、あしぶえ創立45周年記念特別公演として、しいの実シアターと島根県民会館にて上演し、多くの観客の来場を促す。また字幕を日本語にして上演を行う。
無料モニター公演、まつえ市民大学貸切公演として上演し、アンケートを実施。 97％の人が新しくなった「ゴーシュ」が「よかった」、94％の人がアフタースピーチが「よかった」という評価をし、86％の人に「演劇」に対して親しみを持ってもらえたようである。 また、「演劇を観る頻度」についても、今回の「ゴーシュ」を観劇した半数近くの人が「大人になって初めて、あるいは数回」しか観劇したことがないなど、演劇に触れる機会がほとんどないことが明らかになった。 演劇祭のボランティアスタッフは、事前に「観客の立場」で観劇することで、スタッフとして働く際のいろいろな気づきがあったようである。 **・演劇の楽しみ方が少しわかったような気がします（演技者と観客の一体感）。** **・演劇は初めてでしたが「声を出して笑ってもいい」という発見がありました。**	今後も、アンケートを実施し、観客のニーズを探り、より親しみやすい芝居創りへとつなげていきたい。
演劇祭での上演は、最初こそ観客の雰囲気が硬かったものの、芝居が進むにつれだんだんと雰囲気に馴染んでいき、最後のカーテンコールでは拍手が鳴りやまないほどであった。英語字幕については、「芝居の内容がより深く理解できた」と海外の参加劇団員に喜ばれた。 **・セロ弾きのゴーシュの初期の頃のを観ましたが、今日の演技は洗練された表現になっていたと思う。** **・ずいんぶんわかりやすく変化しているように思いました。動きもとても細やかで、温かいものでした。観客と共に作りあげるということを体験しました。** **・何回か観ましたが、今回は、思わず劇に引き込まれてしまいました。**	2011（平成23）年度は、あしぶえ創立45周年記念特別公演として、しいの実シアターと島根県民会館にて上演し、多くの観客の来場を促す。また字幕を日本語にして上演を行う。

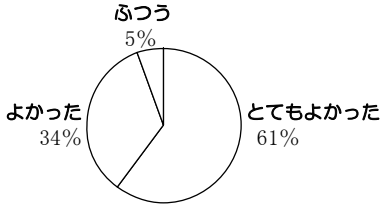
Q．字幕については？

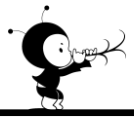


Q．アフタースピーチの感想



Q．スタッフの対応





② 表現・コミュニケーション能力育成のための事業

この事業の目標	コミュニケーション力の育成を

社会の現状

「コミュニケーション」は本来、人と人とが向き合って交流することで生まれるものです。しかし、IT社会の到来によって、人は「人」と向き合うのではなく、パソコンやゲーム機、携帯などの「機械」と向き合うことが増えてきました。そのため、学校でも職場でも家庭でも、人々のコミュニケーション力がどんどん低下しています。

相手の目を見て話すことができない

クラスの数人としか話せない

自分のほうから人に声をかけることができない

声が小さい

友だちができない

ゲームをしている時が一番楽しい

などといったことが、学校でも職場でもよく聞かれるようになりました。

対　策

こういった現状に対応するため、あしぶえでは12年前から、国内外の優れた演劇人に学んで、「表現ワークショップ」や「コミュニケーションワークショップ」の講師が務まるよう、経験を積んできました。

そして、学校、企業、地域などへ出掛けていき、ワークショップによるコミュニケーション力を育成する活動をすすめています。

2010（H22）年度の活動は次のとおりです。

詳 が付いている活動については、次ページ以降に記載しています。

		実施日時	実施場所	従事者の人数	受益者の人数
①学校					
講師	松江市立八雲小学校 （3年生2クラス×10回/年間38時間）	H22/6～12	松江市立 八雲小学校	延べ 20名	延べ 720名
講師	松江市立恵曇小学校 （1～4年生2回、5、6年生1回）	H22/5/19、20 H23/2/4	松江市立 恵曇小学校	延べ 8名	延べ 197名
講師	出雲市立四絡小学校（3年生3クラス） 出雲メセナ協議会「芸術家派遣事業」	H22/6/22、23	出雲市立 四絡小学校	延べ 2名	96名
講師	松江市立鹿島中学校 （2年生2クラス×2回）	H22/6/28 H22/9/10	松江市立 鹿島中学校	延べ 4名	延べ 120名
講師 詳	広島市立五日市中学校 （1年生9クラス）	H22/4/15、16	広島市立 五日市中学校	3名	295名
講師	青少年育成事業 新中学1年生宿泊研修	H23/3/22	雲南市吉田町役場 交流室	2名	19名
講師	平成22年度ジュニアリーダー研修 （八束中学校・島根中学校合同）	H23/3/26	島根県立青少年の家 （サンレイク）	1名	26名
講師	島根大学教育学部フォーラム（紙面評価）	H23/2/17	国立大学法人 島根大学	1名	250名
事業協力	文化庁「芸術家派遣事業」 NPO法人子どもとメディア「シアタープロジェクト」 サポート	H22/5/20、28 6/15、25、7/1、2	松江市立川津小学校、玉湯小学校、城北小学校、中央小学校	延べ 15名	延べ 700名
②地域、PTA、企業、その他					
講師	松江市歯科保健指導研修会 コミュニケーションワークショップ	H22/4/28	松江市 歯科医師会館	1名	19名
講師 詳	まつえ市民大学シニアカレッジⅠコース コミュニケーションワークショップ	H22/5/28	松江市 市民活動センター	3名	49名
講師 詳	まつえ市民大学ふるさとカレッジ発見コース コミュニケーションワークショップ	H22/6/1	松江市 市民活動センター	3名	49名
講師	ひよし保育園（島根県松江市） 保護者研修会	H22/6/18	ひよし保育園	1名	17名
講師	松徳幼稚園（島根県松江市） 家族参観ワークショップ	H22/6/20	松徳幼稚園	1名	89名
講師	松江市公民館松南ブロック・湖南ブロック 合同職員研修会	H22/8/30	松江市乃木公民館	1名	25名
講師 詳	株式会社さんびる 研修会 「コミュニケーションUP研修」（八雲国際演劇祭事業と連動）	H22/9/13	まつえテルサ	2名	44名
講師 詳	中浦グループ 研修会 （八雲国際演劇祭事業と連動）	H23/3/9	テクノアークしまね （松江市）	3名	81名
講演	第60回社会を明るくする運動 安来市推進大会 「コミュニケーション力・対話力～真実を探しながら～」	H22/7/9	安来市 広瀬中央交流センター	1名	120名

表現・コミュニケーション能力育成のための事業

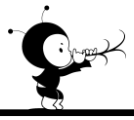
実施項目	現状	対策
広島市立五日市中学校でワークショップを実施	広島県一のマンモス校である同校は、いくつもの小学校から進学し、卒業するまで小学校区の枠から抜け出せない生徒が多いため、「クラスの誰とでも話せるように、またどんどん友だちがつくれるように」との依頼があった。	入学式直後の4月に「コミュニケーションワークショップ」を実施することにした。
まつえ市民大学でワークショップを実施	まつえ市民大学事務局が受講生にアンケートを取った結果、「1年間の受講期間中に同じクラス生となかなか親しくなれない」との感想が多くあったことが判った。 これについて何かいい方法はないか、との発言があった。	その解決方法として、「コミュニケーションワークショップ」を提案し、2008（H20）年度から、2講座において、市民大学入学式後最初の講座で、ワークショップを実施している。 この講座が毎回好評で、2010年度も実施した。
企業でワークショップを実施 （八雲国際演劇祭事業と連動）	「八雲国際演劇祭」への寄付をお願いするため、地元企業を訪問した際、責任者の方々から、社員や職員のコミュニケーション力が低下していることを度々聞かされた。	そこで、多額の寄附をいただいた企業に対し、返礼として「出前講座」を提供することにした。 2009（H21）年度の山陰合同銀行株式会社に続き、2010（H22）年度は株式会社さんびると中浦食品株式会社にてワークショップを行った

身体を使って形づくりをしながら
友達との「協力」や「コミュニケーション」を
学びます。（出雲市立四絡小学校）

目を合わせながら握手をすると、自然に
「笑顔」があふれます。（まつえ市民大学）

効果・成果	今後の方針・課題
1学年9クラスを3つに分けて実施。羞恥心や性別などの意識が芽生え始める年代であることと、他の小学校から来た生徒と初めて対面する緊張感からか、最初は固い雰囲気であった生徒たちも、2時間のワークショップが終わるころには打ち融け合って、それぞれの「クラスの輪」ができていた。	学校側の反応は、大変好評で、2011（H23）年度も実施予定
子どもたちだけでなく、大人になっても知らない人たちが集まるところに参加するのは緊張するものであるが、ワークショップのような交流の場を提供することで、相手との距離を縮めることができ、「市民大学に1年参加するのが楽しみになった」という感想が聞かれた。 **・一気に交流が図れました。** **・初めの頃は少し気恥ずかしさがありましたが、進むにつれて和やかになり、コミュニケーションがとれました。** **・肌や心の触れ合うコミュニケーションで、初めて出会った人とは思えないほど親しみがわきました。**	2008（H20）年度から好評で毎年実施している。 2011（H23）年も実施予定。
株式会社さんびる **・コミュニケーションをとることは改めて楽しいと感じました。（20代男性）** **・お客様や社員同士のコミュニケーションを、より一層深いものにしたいと思いました。（50代女性）** 中浦食品株式会社 **・いつも顔を合わせることのない社員同士が、何かを一緒にやって達成することを共有できた有意義な時間でした。（20代男性）** **・社員間のふれあいができました。（40代男性）**	実施した企業は、どこでも大変喜ばれているので、今後も継続していく。

いろいろな人と「話す」ことで、相手を知り新たな発見があります。（歯科保健指導研究会）



③ しいの実シアターの管理・運営事業

この事業の目標	しいの実シアターを市民が親しむ劇場に

社会の現状

松江市立劇場である「しいの実シアター」の設置目的は、「恵まれた自然環境の中で、演劇を通じて市民の文化の向上と情操の涵養を図り、かつ、八雲町の演劇文化の拠点となる」ことです。

これに対し、シアターが完成した1995年（平成7）から演劇公演を続けていますが、今後は、八雲町はもとより松江市内全域からの誘客を図っていくことが求められています。

対　策

あしぶえでは、指定管理者として「しいの実シアター」の設置目的に沿って、演劇公演の制作と上演、表現・コミュニケーション能力育成のための事業、八雲国際演劇祭の運営に関わる事業を有機的に展開させています。

特に、乳幼児を育てている市内の保護者からは、「子どもに良いものを観せたい」という観劇希望が多いので、その需要に応えていくため、国内外の良質の作品を提供していきます。

2010（H22）年度の活動は次のとおりです。

詳 が付いている活動については、次ページ以降に記載しています。

		実施日時	実施場所	従事者の人数	受益者の人数
事業 詳	松江市立八雲中学校 1年生「地域を知る学習」 シアター見学	H22/10/1	松江市 しいの実シアター	1名	5名
事業 詳	クラウン公演 蒼い企画 「びりとブッチー」	H22/6/16～18	松江市 しいの実シアター	7名	538名
事業	人形劇団ひぽぽたあむ 「ハリネズミと雪の花」（「第4回八雲国際演劇祭」 ファミリー公演として上演）	H22/11/5、6	松江市 アルバホール	13名	315名
事業	多文化理解講座 「通訳する人、される人」 「カメレオンの伝言ゲーム」	H23/2/18 H23/2/19	松江市 アルバホール しいの実シアター	5名	83名
事業 詳	文化講演会 坂東元氏 「伝えるのはいのちの輝き」	H22/5/16	松江市 しいの実シアター	7名	123名
事業	シアター見学 八雲児童クラブ 劇場体験	H22/8/4	松江市 しいの実シアター	2名	40名
管理	平原あしぶえ会による草刈りボランティア	H22/6/6	松江市 しいの実シアター	46名	不特定多数

クラウン公演の「びりとブッチー」

公演前のアトラクションを楽しむ子どもたち

「平原あしぶえ会」やサポート会員の皆さまの協力により、シアター敷地内の草が一掃されました

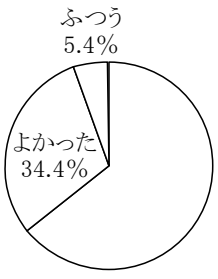
しいの実シアターの主催事業

実施項目	現状	対策
クラウン公演 「びりとブッチー」蒼い企画	地方の劇場では、質の高い公演を呼んで子どもたちに観劇してもらう機会をつくることは、なかなか難しい。	日本のみならず、海外でも高い評価を得ている本格派クラウンの良質コメディの上演を企画。演劇の楽しさを充分に味わってもらえる舞台を、子どもたちに観劇してもらった。
人形劇公演 「ハリネズミと雪の花」 ひぽぽたあむ 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業	第3回の演劇祭までは、小さな子どもたちや親子連れに観てもらう作品がなかったため、観劇のニーズに応えることができなかった。	第4回の演劇祭から、3歳から観てもらうことができるように「ファミリー公演」を新設し、人形劇公演を実施した。子どもたちだけでなく、大人の胸にも迫る感動作品であった。
文化講演会 「伝えるのはいのちの輝き」 坂東元氏	「しいの実シアター」に市民の方に来て利用してもらうため、演劇のみならず、他のジャンルの催し物を開催し、シアターを知ってもらう機会をつくる。	日本中から注目を集めている北海道旭川市の「旭山動物園」の園長である坂東元氏に来てもらい、これまでの動物園ではやっていなかった「動物の生態」を展示するなど、「命の輝き」についての講演をお願いした。

しいの実シアター利用者の声

あしぶえは、「指定管理者」として、「しいの実シアター」の施設管理を行っています。
2010（H22）年度の来場者に対して、しいの実シアターについてのアンケートを行った結果を下記に示します。（アンケートの設問毎に、有効回答のみを集計しました。無記入は集計に含まれておりません）

Q. シアターにおいでになって、駐車場誘導、もぎり、場内案内、グッズ販売などのスタッフの態度は、満足できるものでしたか。



（有効回答183名）

- あいさつが気持ちよかった。
- 教育されたものではなく、スタッフの方がシアターに寄せる気持ちが表れていたと思います。
- 子どもさんがアンケートを渡してくれるアットホームな雰囲気がとてもよいと思いました。
- 若い人たち、子どもたちの声、あいさつ、･･･とても心地よいものでした。久しぶりに、人と人とのあたたかいものを感じとりました。

効果・成果	今後の方針・課題
クラウンのパフォーマンスは大道芸として、戸外や路上で行なわれることが多く、劇場で見せる「クラウニング」は全国的にも珍しい。幼児、小学生、高齢者、在宅母子ともに好評で、笑いが絶えなかった。高齢者が子どもたちの中に入って観劇することで、笑いのタイミングや感じる内容も異なり、会場の雰囲気を盛り上げる相乗効果が生まれた。観劇だけでなく、シアター周辺の自然散策や弁当を持参して近くのかやぶき交流館や平原会館を一緒に利用する園も増えており、地元活性化につながっている。	松江市内の幼稚園、保育園の参加が年々増えてきていることから、2011（H23）年度からステージ数を増やしていく。 各園で大型バスやジャンボタクシーを利用し、島根町などの遠方からの参加もあるが、松江市内からシアターまでの公共交通機関が無いため、輸送機関をどう確保していくかが課題である。
チケット発売後すぐに完売となり、小さな子どもを持つ親が生の舞台芸術に触れさせたいというニーズの高さを実感した。 アンケートによる観劇満足度は、「とてもよかった」が76％、「よかった」が17％であった。この人形劇団は、こころの動きを丁寧に表現することを大切にしており、細やかな心情表現が巧みで、子どもばかりでなく大人の観客をも満足させた。	観客のニーズに対応し、親子観劇のできる作品の上演を増やしていくことで、生の舞台芸術への興味・関心を育てることにつなげていきたい。
「話題の人」であるだけに、初めてシアターに出かけてくる人が多く、しいの実シアターの存在を周知することには、大きく貢献した。また、動物の視点で徹底的に展示の方法や観客に伝える方法を模索されている坂東さんの姿に厳しいものを感じ、劇場運営、演劇の創造活動にも刺激となった。	演劇公演だけでなく、演劇に興味・関心の薄い人でも、シアターを身近に感じてもらうよい機会として、今後も幅広い講演会企画を行なっていく必要がある。

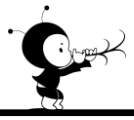
● Q. しいの実シアターの感想はいかがでしたか。

・山里の自然の中で、雰囲気がよい。
・木のぬくもりを感じるすてきなシアターでした。
・ステージと観客席がとても近く、役者さんの迫力が伝わってきてよかった。
・舞台が低いので、演じる俳優さんと目が合い、新鮮な感じがしました。
・場所はいいのですが、石段の辛い年代になりました。
・トイレの場所が分かりにくく、迷ってしまった。何かいい方法を考える必要があると思った。
また足の不自由な方への対応、ありがとうございました。

→ 標示については、さっそく見やすいものに直すよう、検討いたします。
歩行にお手伝いが必要な方へは、車椅子の貸出、スロープのご案内、駐車場～シアター間の送迎補助などを行っておりますので、お気軽にお尋ねください。

・きれいにされた駐車場、周辺の木立、「また来たいな」という気持ちになりました。
・清潔さ、手作り感もあふれ、季節の花が生けてあり、里の秋を感じました。

→ 館内の花は、サポート事務局メンバーが生けています。
また、地元「平原あしぶえ会」やサポート会員のみなさんの協力で、春と秋の草刈りや、初冬の落ち葉拾いなどを行っています。



④ 八雲国際演劇祭の運営に関わる事業

この事業の目標	「八雲国際演劇祭」で人づくり・まちづくりを

社会の現状

「国際化」の時代がやってくるといわれて久しくなりますが、私たちが暮らす地域では「国際化」を実感として感じることはほとんどありません。

しかし、今後はまぎれもなく国際化の波が押し寄せてくるでしょう。島根でも、学校、職場、地域でさまざまな国の人たちと共に学び、共に働き、共に暮らしていくことになります。

けれども、言葉が違い、文化や習慣が違うということは、共に暮らす上で大きな障害になり、誤解や不信感が生まれたりします。

対　策

「八雲国際演劇祭」は、演劇のフェスティバルですが、実は、「開催目的」やボランティスタッフ用の「活動の指針」はもちろんのこと、運営の進め方はあらかじめ国際化時代に通用する内容に作成されています。

ですから地域の人々がボランティアスタッフとなって演劇祭の準備・開催・振り返りを丁寧に行っていけば、言語の違いや文化の違いを受け入れて共に暮らしていけるようなまちづくりができると考えています。

2010年度は、4回目の開催年であり、400人のボランティアスタッフが気持ちを一つにして、開催しました。

つながりこそ　私たちの財産

第4回の演劇祭も、たくさんの「つながり」が生まれました。
それは、参加した全員の「財産」となりました。

関西国際空港から5時間半かけて到着した参加劇団員と
対面するホストファミリーたち

満員の観客と劇団員の心がひとつになり
すこぶる賑やかで心に残った開会式

400人のボランティアのつながりが
演劇祭の成功の秘訣です

八雲町内観光では、地元の人たちとの
新たなつながりも生まれました

参加劇団員は引っ張りだこの学校訪問

2010(H22)年度の活動は次のとおりです。

詳 が付いている活動については、次ページ以降に記載しています。

		実施日時	実施場所	従事者の人数	受益者の人数
活動PR	松江市統計協会研修 八雲国際演劇祭の歩み　情報提供	H22/4/13	松江市 しいの実シアター	2名	約50名
活動PR	中国労働金庫労働組合職員研修 八雲国際演劇祭の歩み　情報提供	H22/4/24	松江市 しいの実シアター	5名	約60名
活動PR	松江商工会議所ほか地元企業訪問 支援・協力依頼	H22/6～10 (5ヶ月間)	松江商工会議所、島根県庁、松江市役所など	2名	不特定多数
活動PR	東京大学大学院生による調査研究に協力	H22/6～H23/3	松江市 しいの実シアター	2名	1名
活動PR	第4回八雲国際演劇祭　記者発表	H22/7/8	松江市役所	5名	不特定多数
活動PR	本格スタートの集い	H22/7/26	松江市 アルバホール	7名	88名
活動PR	境港市役所、境港商工会議所訪問 支援及び観劇依頼	H22/8/6	境港市役所 境港商工会議所	2名	10名
活動PR	東北大学生による調査・研究に協力	H22/8/19	松江市 しいの実シアター	1名	4名
活動PR	演劇祭30日前街頭PR	H22/10/4	JR松江駅前	7名	不特定多数
活動PR	演劇祭20日前街頭PR	H22/10/14	JR松江駅前	6名	不特定多数
活動 詳	第4回八雲国際演劇祭　開催 特別公演、ファミリー公演 コンテスト公演 学校公演、学校訪問 YITFレストラン、キッズレストラン	H22/11/3～11/7	松江市 しいの実シアター アルバホール	400名	延べ11,000名
活動PR	八雲町地域振興活動団体交流会	H22/11/27	松江市 ゆうあい熊野館	4名	約40名
活動PR	島根県立大学「NPO講座」特別講師 「八雲国際演劇祭の歩み」	H23/1/17	浜田市 島根県立大学	2名	約100名
研修	「ファンドレイジング日本2011」研修	H23/2/5～6	東京 日本財団ビル	2名	8名
活動PR	八雲町地域振興活動団体交流会	H23/3/19	松江市 ゆうあい熊野館	2名	約40名

		実施日時	実施場所	従事者の人数	受益者の人数
活動PR	島根県立大学生　里山暮らし体験受け入れ	H23/3/27	松江市 しいの実シアター	2名	2名
活動PR	松江市報8月号裏表紙 第4回八雲国際演劇祭告知記事掲載	H22/7発行	松江市内配付	3名	不特定多数
活動PR	松江市報10月号見開き2ページ 第4回八雲国際演劇祭告知記事掲載	H22/9発行	松江市内配付	3名	不特定多数
活動PR	演劇会議　135号 「親しみやすさがひろがった第4回八雲国際演劇祭」 インタビュー掲載	H23/3/12発行	全日本リアリズム演劇会議	1名	不特定多数
活動PR	演劇月刊誌「演劇と教育」原稿掲載 「しいの実シアターとあしぶえの取り組み」	H23/3	晩成書房	1名	不特定多数
活動PR	エフエム山陰 「モアビタミン」 八雲国際演劇祭告知	H22/9/10	松江市 しいの実シアター	1名	不特定多数
活動PR	エフエム山陰 「モアビタミン」 八雲国際演劇祭告知	H22/10/5	松江市 しいの実シアター	1名	不特定多数
活動PR	NHK松江放送局 「しまねっと」 八雲国際演劇祭告知	H22/10/13	松江市役所	2名	不特定多数
活動PR	山陰ケーブルビジョンマーブル 八雲国際演劇祭告知	H22/10/21	松江市 しいの実シアター	1名	不特定多数
活動PR	日本海テレビ 「スパイス」 八雲国際演劇祭告知	H22/10/23	日本海テレビ	1名	不特定多数
活動PR	NHK第1放送 「おはよう中国」演劇祭告知	H22/10/25	NHK広島放送局	1名	不特定多数
活動PR	山陰中央テレビ 「週刊ヤッホー！」 八雲国際演劇祭告知	H22/10/30	山陰中央テレビ	2名	不特定多数
活動PR	だんだん倶楽部会報　記事掲載	H22/8	(株)浜村建設	1名	不特定多数

八雲国際演劇祭の運営に関わる事業

「第4回八雲国際演劇祭」の概要は次のとおりです。

期　間

平成22年11月3日（水）～7日（日）

会　場

1）しいの実シアター：
　コンテスト公演（ロシア、スロバキア、イタリア、東京、三刀屋高校演劇部）
　特別公演（ブルガリア、イタリア）
2）アルバホール：
　開会式、特別公演（あしぶえ）、八雲小学校公演、表彰式・閉会式、ウェルカムパーティ、さよならガラパーティ
3）学校公演：
　古江小・長江小、忌部小、八雲小
　恵曇小、内中原小、鹿島中
4）学校訪問：
　八雲小、八雲中、湖南中（ベルギークラウン、即興パフォーマンス）
5）かやぶき交流館：
　キッズレストラン
6）平原会館：
　青少年のためのワークショップ
　救護スペース
7）プレハブ・テント：
　インフォメーションハウス
　演劇祭レストラン、喫茶グッズコーナー
　観客待合スペース

人　数

観客総数：3,901人
（ワークショップ参加の40人を含む）
延べ参加者総数：約1万人

成　果

【成果1】

「3歳から楽しめる演劇祭」をキャッチフレーズに、「より親しめる演劇祭」を目指した。初めて大判チラシを作成して親しみやすいデザインにした。その結果、人形劇団ひぽぽたあむのチケットは早々に完売した。

【成果2】

日本語上演のブルガリア、視覚的表現のイタリアなど、特別公演の作品を吟味して招聘したことで、外国の作品に対する違和感が薄れただけでなく、「演劇」に対する「親しみ」が増した。また、コンテスト公演で東京のチイキィ*パークゥや、三刀屋高校を選定した結果、期待以上の舞台となり、チイキィ*パークゥは、「最優秀作品賞」「演出賞」「主演女優賞」を、三刀屋高校は、海外の大人劇団をおさえて観客を満足させ、「観客が選ぶ作品賞」を受賞した。

【成果3】

より多くの子どもたちに、優れた舞台芸術に触れる機会をつくるため、松江市内や雲南市内の、希望する学校に出掛けて、「学校公演」を実施したが、今回は前回を上回る、8つの小中学校で上演することができた。

【成果4】

演劇祭レストランは、前回の経験をもとに経費節減につとめたが、料理の内容を落とすことなくおいしいものを提供することができ、来場者に大変喜んでもらえた。

【成果5】

かやぶき交流館で実施した「キッズレストラン」は、小学生がおもてなしをすることで、マスメディアに取り上げられた。ボランティアスタッフが小学生、中学生、高校生、若者と様々な年代の人たちが入り混じって、演劇祭を準備開催した。

【成果6】

寄附金800万円を集めなければならなかったが、あしぶえだけでなく、今回からボランティアスタッフが自主的に寄附をお願いに回り、みんなの力で目標額に届いた。

【成果7】

演劇祭開催当初からの念願であった、松江駅から八雲までの、シャトルバス(マイクロ)を運行したが、毎回10人以上の利用者があった。これについて次回からPRをより徹底し定着させれば、交通手段をもたない遠距離からの来訪者や高齢者等の増加が見込まれる。

【成果8】

今回は400名のボランティアスタッフが参加した。通算5回の演劇祭を経験して、ボランティアスタッフは確実に成長し、各委員会同士で良好な連携が行なわれるようになり、ボランティア自身が楽しみながら活動できるようになってきた。その結果、自然体のボランティア活動となり、来場者から好感をもって受け入れられるようになってきた。

【成果9】

今回初めてボランティア以外でも、参加劇団との交流が行われた。八雲町で毎年行う神事を、演劇祭のために日にち変更し、「町内観光」という名称で、地区をあげて「日本の伝統行事」を紹介するといった「一般町民の文化交流」が盛大に行われ、町民、参加劇団員双方ともに大変喜ぶといったこともあった。今後、このようなことが全町で広がっていけば、演劇祭の発展につながっていくはずだ。

反省点

【反省点1】

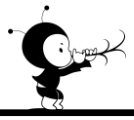
今回も寄附集めに時間を取られ、一部の公演以外で、集客が開催ぎりぎりまで難航した。この点については、その対策方法も判りかけてきたので、次回は事前に対応したい。

【反省点2】

演劇祭開催時期に、八雲町内では毎週のようにイベトがあった。10月第3週には文化祭、第4週には松江市全体の農林業祭、全国規模の民生委員の大会、11月第1週に演劇祭、第2週には町内の収穫祭。大なり小なりこれらに関わっているボランティアのリーダークラスの人たちの負担は、大変大きかった。この点についての改善は簡単ではないが、考慮していかなければならない大きな課題でもある。

次回へ向けての計画

自立した「財源確保(ファンドレイジング)」の手法の確立を目指して、努力を重ねてきたが、まだ、第一歩、第二歩程度に進んだだけに終わっている。一昨年、日本ファンドレイジング協会が設立され、日本に寄附文化を根付かせようという動きも活発になってきた。今回約800万円の寄附を集め、そのうちの約200万円は、昨年度から制定された「しまね社会貢献基金」を通した寄附となり、寄附者にとっては、税制優遇措置があるため、寄附しやすい環境はつくられた。こういった社会の変化を敏感に取り込みながら、次回の演劇祭までにファンドレイジングの確立を図りたい。今回の演劇祭が終わって、ブルガリアからの参加劇団員は、「いままで150の国際演劇祭に参加したが、このようなあたたかいホスピタリティ溢れる演劇祭は初めてだ」と絶賛。今後、より努力して、世界に通用する演劇祭に育てていきたい。



サポート会の活動

2010（H22）年度のサポート会員は個人・団体合わせて279名/団体でした。
その中のメンバーでつくる「サポート会事務局」で、毎月話し合いを行い、さまざまな活動を展開しています。

サポート月例会

▶**日時**　毎月第1月曜日　19:30から2時間程度

▶**会場**　しいの実シアター

▶**メンバー**　会社員、公務員、主婦など20代から60代まで
年齢、職種ともさまざまな女性11名、男性2名の合計13名。

▶**内容**　下記のサポート会活動についての話し合いが、和気あいあいと賑やかに続けられています。

公演当日のサポート

2010（H22）年度は、「第4回八雲国際演劇祭」の開催年であり、サポート会事務局メンバーも、全員がボランティアスタッフとして活動しました。そのため、毎年行っている、「落ち葉集め」エコ活動や、会員交流会は開催することができませんでした。
10/3（日）に「セロ弾きのゴーシュ」のモニター公演及びまつえ市民大学貸切公演において、事務局メンバーのほか、家族、友人など、およそ20名が、「受付」「もぎり」「会場案内」「グッズ販売」「駐車場誘導」などの活動に精を出しました。

法人全体の運営

2010（H22）年3月31日現在、
あしぶえの正会員は個人73名、団体6件、
創造活動会員16名、
そして、あしぶえを応援してくださるサポート会員は個人266名、団体13件です。
2010（H22）年度も、多くのみなさまに支えていただき、ありがとうございました。

●「第5回通常社員総会」を開催しました

▶2010（H22）年5月16日（日）13:00～15:00

しいの実シアターで、正会員85名*のうち、出席者23名、委任状41名、合計64名で開催。2009（H21）年度の事業報告、決算報告、会費報告、2010（H22）年度の事業計画、収支予算等についての承認を行いました。

＊ 総会には、新年度に入会された方も参加されています。

● 理事会を開催しました

▶第46回 H22/5/13（木）、第47回 H23/2/20（木）、第48回 H23/3/16（水）

理事10名で、3回の理事会を開催しました。
NPO運営について、さまざまな話し合いを行いました。

園山土筆が、NHKのラジオ番組「おはよう中国」に出演中

▶2009（H21）年度からの出演が3年目に入りました。毎月1回、第4月曜日の朝7時46分ごろから、「演劇」「表現・コミュニケーション」などについての話題を提供し、中国地方5県に放送されました。2011（H23）年度は、**第2月曜日の朝7時46分**ごろからです。どうぞ、お聞きください。

あしぶえのメンバーが毎月マーブルテレビに登場

▶2010（H22）年4月～2011（H23）年3月

悪徳商法の被害防止のため、さまざまな実例を寸劇で紹介し、松江市民のみなさんに啓発をはかるため、松江市市民部市民生活相談課の依頼で、毎月1回、松江市広報番組の消費者みまもり情報「こげなとき、どげすーだぁ」に出演しました。

森田智代さん退職

会計担当の森田智代さんが、2011（H23）年3月31日付けで退職しました。約4年間、あしぶえと、2回の演劇祭の会計事務に尽力してもらいました。明るい性格で、いつも事務所があたたかい雰囲気になりました。

鳴尾朋子さん入社

森田智代さんの後任として、2011（H23）年4月1日付けで、鳴尾朋子さんが入社しました。
みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

2010(H22)年度　事業会計収支計算書

2010(H22)年4月1日から2011(H23)年3月31日まで

特定非営利活動法人　あしぶえ

科　　目	予算額	決算額	増減	摘　　要
Ⅰ収入の部				
1. 会費収入	2,340,000	2,279,000	△61,000	
正会員	810,000	790,000	△20,000	個人73名、団体6件
創造活動会員	384,000	406,000	22,000	創造活動会員16名、短期創造活動会員3名
サポート会員	1,146,000	1,083,000	△63,000	個人266名913口、団体13件17口
2. 寄附金収入	300,000	655,366	355,366	
寄附金	100,000	552,623	452,623	八雲総合サービスほか個人、団体
夢貯金	200,000	102,487	△97,513	グッズなどの売上金
受取利息収入	0	256	256	
3. 事業収入				
①演劇公演の制作及び上演	4,510,000	8,599,216	4,089,216	
寄附金収入	0	14,000	14,000	
事業収入	180,000	1,870,120	1,690,120	ゴーシュ、演劇祭イタリア、ブルガリア入場料収入他
委託金収入	300,000	1,160,000	860,000	演劇祭特別公演上演委託金他
助成金収入	4,000,000	5,479,000	1,479,000	文化庁、三菱UFJ信託地域文化財団
雑収入	30,000	76,096	46,096	
②表現及びコミュニケーション能力育成のための事業	500,000	436,591	△63,409	
事業収入	500,000	436,500	△63,500	学校向け表現授業、社会人向けワークショップ
受取利息収入	0	91	91	
③しいの実シアターの管理、運営事業				
施設の管理運営	4,082,000	4,258,742	176,742	
事業収入	1,320,000	1,494,137	174,137	シアター貸館利用料
委託金収入	2,762,000	2,762,000	0	松江市シアター指定管理料
補填金収入	0	2,605	2,605	
芸術文化教育振興事業	1,613,000	1,730,928	117,928	
事業収入	635,000	752,500	117,500	シアター事業入場料収入
補助金収入	978,000	978,000	0	松江市芸術文化教育振興事業費
補填金収入	0	428	428	
④国際演劇祭の運営に関わる事業	0	1,841,400	1,841,400	
助成金収入	0	1,841,400	1,841,400	しまね社会貢献基金
管理費(全体運営)	19,280,500	18,454,806	△825,694	
補助金収入	4,426,000	4,426,000	0	松江市芸術文化教育振興事業費
委託金収入	1,638,000	1,638,000	0	松江市シアター指定管理料
助成金収入	0	97,000	97,000	文化庁(アートマネージメント講座分)
負担金収入	12,816,000	11,515,285	△1,300,715	演劇祭より人件費(スタッフ5名、繁忙期アルバイト2名)
受取利息収入	500	494	△6	
雑収入	400,000	778,027	378,027	マーブル出演連絡調整費他
補填金収入	0	0		
当期収入合計(A)	32,625,500	38,256,049	5,630,549	
前期繰越金	3,419,056	3,419,056		
収入合計(B)	36,044,556	41,675,105	5,630,549	

科　　目	予算額	決算額	増減	摘　　要
Ⅱ支出の部				
1. 事業費				
①演劇公演の制作及び上演	6,799,000	11,063,381	4,264,381	
給料手当	0	35,630	35,630	
通信費	49,000	74,421	25,421	
旅費交通費	631,000	2,279,003	1,648,003	演劇祭 イタリア、ブルガリア渡航宿泊費他
広告宣伝費	30,000	0	△30,000	
印刷経費	60,000	155,067	95,067	
接待交際費	102,000	73,888	△28,112	
慶弔費	20,000	0	△20,000	
諸謝金	1,714,000	4,139,228	2,425,228	演劇祭 イタリア、ブルガリア上演料他
事務用消耗品費	3,689,000	3,325,486	△363,514	ゴーシュ製作費(大道具、衣裳他)
研修費	100,000	11,250	△88,750	
新聞図書費	16,000	13,045	△2,955	
リース料	285,000	902,988	617,988	演劇祭 シアター使用料
租税公課	0	1,500	1,500	
支払手数料	10,000	22,035	12,035	
雑費	93,000	29,840	△63,160	
②表現及びコミュニケーション能力育成のための事業	500,000	413,250	△86,750	
給料手当	300,000	150,250	△149,750	
旅費交通費	100,000	98,100	△1,900	
諸謝金	100,000	161,900	61,900	
諸会費	0	3,000	3,000	
③しいの実シアターの管理、運営事業				
施設の管理運営	4,082,000	4,258,742	176,742	
施設管理費	878,460	887,395	8,935	
樹木管理費	486,000	632,880	146,880	平原あしぶえ会の草刈1回＋松浦造園
通信費	252,000	307,649	55,649	
水道光熱費	1,800,000	1,626,579	△173,421	
印刷経費	200,000	333,316	133,316	
修繕費	100,000	82,764	△17,236	
リース料	309,486	302,610	△6,876	コピー機、輪転機リース料
諸会費	6,000	6,000	0	
雑費	50,054	79,549	29,495	
芸術文化教育振興事業	1,613,000	1,730,928	117,928	
通信費	2,000	12,080	10,080	
旅費交通費	371,000	413,170	42,170	びりとブッチー、ひぽぽたあむ、坂東元他
広告宣伝費	130,000	129,615	△385	
諸謝金	990,200	1,078,000	87,800	びりとブッチー、ひぽぽたあむ、坂東元他
リース料	100,000	86,450	△13,550	シアター利用料
支払手数料	0	630	630	
雑費	19,800	10,983	△8,817	
④国際演劇祭の運営に関わる事業	0	1,841,400	1,841,400	演劇祭へ補填
補填金支出	0	1,841,400	1,841,400	
2. 管理費(全体運営)	21,136,500	19,210,557	△1,925943	
給料手当	16,800,000	14,507,600	△2,292,400	スタッフ5名、繁忙期アルバイト2名人件費
法定福利費	1,800,000	1,776,263	△23,737	
福利厚生費	50,000	114,866	64,866	
通信費	150,000	64,170	△85,830	
旅費交通費	200,000	325,096	125,096	自家用車使用のガソリン手当
広告宣伝費	150,000	76,882	△73,118	
印刷経費	200,000	96,973	△103,027	
接待交際費	50,000	33,879	△16,121	
慶弔費	50,000	22,980	△27,020	
会議費	10,000	1,155	△8,845	
諸謝金	1,252,500	1,857,500	605,000	会計士相談料、パソコンインターネット技術料他
事務用消耗品費	10,000	4,518	△5,482	
研修費	30,000	0	△30,000	
新聞図書費	30,000	17,450	△12,550	
リース料	30,000	14,000	△16,000	シアター利用料
租税公課	4,000	4,000	0	
諸会費	120,000	144,614	24,614	国際アマチュア演劇連盟、松江市文化協会他
支払手数料	160,000	140,578	△19,422	ニコス手数料、郵振手数料
補填金支出	0	3,033	3,033	
雑費	40,000	5,000	△35,000	
当期支出合計(C)	34,130,500	38,518,258	4,387,758	
当期収支差額(A)-(C)	△1,505,000	△262,209	1,242,791	
次期繰越収支差額(B)-(C)		3,156,847		

「特定非営利法人あしぶえ」の活動概要

創立

1966年、島根県松江市を拠点に、園山土筆ら5人の若者で「劇団あしぶえ」を創立。
＜演劇を人々の暮らしの中へ浸透させたい＞と活動を始め、2005年12月法人格取得。

国際的な活動

あしぶえの代表作である「セロ弾きのゴーシュ」は、
1994年 「第2回アメリカ国際演劇祭」で、「第1席」「演出賞」「舞台美術賞」獲得。
1998年 「第4回リバプール国際演劇祭」で「観客が選ぶ作品賞」「主演男優賞」受賞。
2003年 「2003世界演劇フェスティバル」(カナダ)で「視覚的表現最優秀賞」受賞。

劇場建設と国際演劇祭開催

長年の夢であった「100人劇場」建設の積み立てをはじめて9年目、八雲村(現・松江市)との出会いがあって、「しいの実シアター」が建設されることになり、あしぶえも3000万円を集めて設計に参画。1995年、国内初の公設民営「しいの実シアター」が完成した。
1999年、＜地域住民・八雲村行政・あしぶえ＞の三者が一体となって「八雲国際演劇祭」がスタート。2007年の「第3回」には、420人のボランティアスタッフが企画・運営し、世界40カ国81劇団から参加の問い合わせがあり、9カ国10劇団が競演した。

夢は、世界的なまちづくり

これら「演劇創造活動」「劇場の管理・運営」「国際演劇祭開催」のほか、学校、PTA、企業等の「コミュニケーション能力育成」などに対応するため、県内外での「表現授業」や、「コミュニケーションワークショップ」などの活動を行っている。また、地域が抱えるさまざまな問題に対して、演劇が持つ「感性」「想像力」「創造性」「洞察力」などを活かして、＜演劇による世界的なまちづくり＞へと発展させるプランを進めている。

■「NPO法人あしぶえ」の上記以外の主な受賞

1993年 「島根県文化奨励賞」
1994年 「地域文化功労者」 文部大臣表彰
1995年 中国新聞社 「中国文化賞」
1995年 山陰信販株式会社 「地域文化賞」
1997年 サントリー文化財団 「サントリー地域文化賞」
2003年 国際交流基金 「地域交流振興賞」 (現・「地球市民賞」)

■「八雲国際演劇祭」の受賞

2004年 島根ふれあい環境財団21 「島根県ふるさとづくり賞」
2005年 島根県 「島根県文化奨励賞」
2006年 国土交通省地域づくり表彰 「国土交通大臣賞」
2007年 総務省 「地域づくり総務大臣表彰」

■「しいの実シアター」の受賞

2006年 「島根県景観賞優秀賞」
2009年 財団法人地域創造 「JAFRAアワード(総務大臣賞)

陰中央新報　2010年（平成22年）5月27日

ありのままの姿に感動を

旭山動物園 坂東園長 命の尊さを訴え

松江で講演

北海道旭川市の人気動物園・旭山動物園長の坂東元氏が、松江市八雲町平原のしいの実シアターで講演し、「野生動物はショーや芸ではなく、ありのままが一番美しい。その中から感動を見つけてほしい」と同園の運営方針をひもとき、命の尊さを訴えた。

「野生動物はありのままが一番美しい。その中から感動を見つけて」と話す坂東園長

同園は、ペンギンが水中を泳ぐ姿を観察しやすくするなど、動物のありのままの姿を見せる展示が人気を呼んでいる。

坂東氏は、展示を工夫するきっかけとしての経験談を紹介。興味深そうにアザラシを眺める子どもに対して大人が「これはラッコじゃない。ただのアザラシ」と水を差すのを見かけ「命がつまらないと思われるのが悔しい」と感じた。

「そんな生命観をつくったのは動物園。『ラッコが来たから見に来てね』と目先を変えることばかりだから、『ただのアザラシ』になった」と業界が陥りがちな発想を批判した。

痛みや苦しみを受け入れ、死んでいく動物の姿に「生きる純粋さ、気高さを感じる」と自らの生命観を披露。新しい動物が来た、生まれたとPRするだけでなく、死んだことも広報する同園の取り組みを挙げ、「生きるってそんなにいいもんじゃない」と訴えた。都合のいいもんだ

山陰中央新報　2010年5月27日付

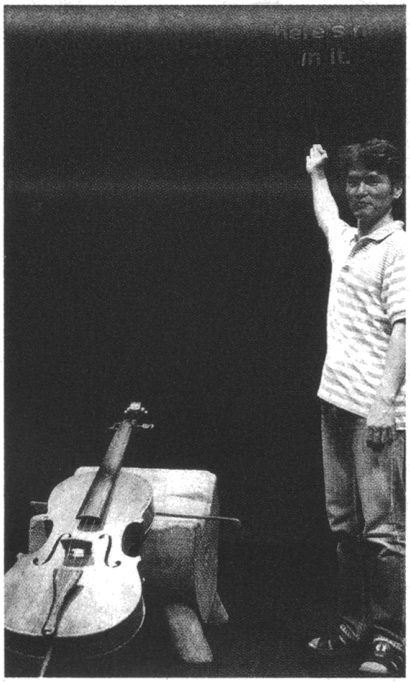
読売新聞
（第3種郵便物認可）

誰でも楽しめる字幕演劇

松江「あしぶえ」導入

11月まず英語 音声ガイドも検討

松江市のアマチュア劇団「あしぶえ」（園山土筆代表）が、外国人や身体障害者も不自由なく楽しめるよう、字幕や音声ガイドを導入した「ユニバーサル版」の演劇づくりに取り組んでいる。11月に同市で開かれる「第4回八雲国際演劇祭」では、英語の字幕をつけた「セロ弾きのゴーシュ」を上演する予定。団員たちは「より大勢の人に劇を楽しんでもらいたい」と意気込んでいる。



舞台上の幕に映し出された英語の字幕を示す小岩崎さん（松江市のしいの実シアターで）

「Ａｎｇｅｒ（怒り）……」。同劇団の劇場「しいの実シアター」（松江市八雲町）の舞台の幕に、プロジェクターを通して、英語の文字が浮かぶ。劇場後方で、劇団員の小岩崎里瑠さん(40)がパソコンを操作すると、続けて、「ｈａｐｐｉｎｅｓｓ（喜び）……」の文字が映し出された。本番では、英語の文字が映ると同時に、「怒るも、喜ぶも……」と役者が日本語でセリフを言う。

字幕は今年7月から制作。既存の英訳をベースに、劇団員16人で推敲を重ねてきた。客席には、英語の字幕を読む外国人客もいれば、日本語のセリフを聞く地元の客もいる。同じ場面で客の反応に時間差が出たりしないよう、セリフと字幕のタイミングを合わせるのが難しいという。字幕を一語一語区切って映すのは、工夫の一つだ。

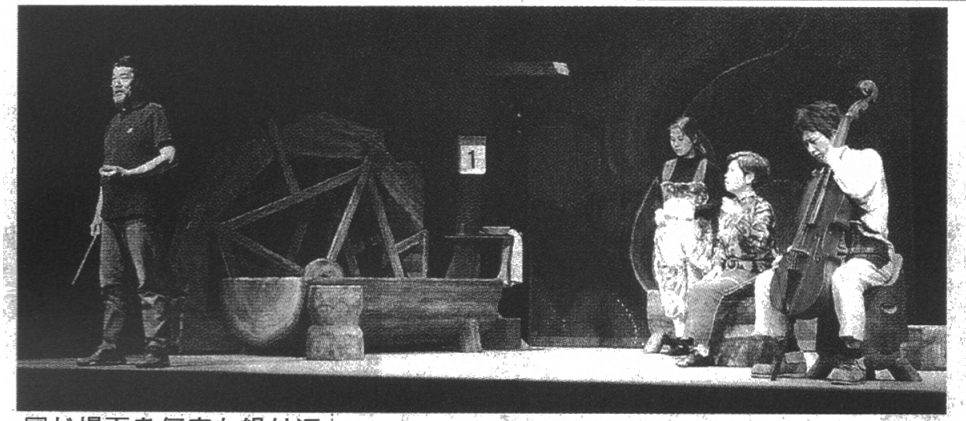
導入のきっかけは、約2年前、約10人の障害者の団体が劇を見に来たこと。耳の不自由な人たちは、手にした端末の画面に台本を表示することでセリフを確認していた。「手元ばかり見て舞台に目がいかず、肝心の役者の演技を十分楽しめないのでは」。そんな思いから、舞台上の幕に字幕を映す方法を考えた。

11月の国際演劇祭は海外の劇団向けだが、来年7月の劇団創立45周年の記念公演では、聴覚障害者向けに、日本語の字幕をつけて演じる。目の不自由な人にも配慮し、簡単な情景説明をする音声ガイドも準備するという。

小岩崎さんは「字幕などがあれば、高齢者にもさらに分かりやすい劇になるはず。よりたくさんの人が楽しめるよう努力したい」と話している。

読売新聞　2010年8月24日付

個性豊か 情熱舞台



同じ場面を何度も繰り返し、演技や照明の確認をするあしぶえのメンバー

八雲国際演劇祭 松江で3日開幕

6カ国11劇団 人形劇や喜劇

3年に1度開く「八雲国際演劇祭」が3日、松江市八雲町のアルバホールで開幕する。7日までの期間中、6カ国11劇団が、人形劇からコメディーまで個性豊かな舞台を披露する。主催者で、主会場のしいの実シアター（八雲町平原）を拠点に活動する劇団のNPO法人あしぶえも、準備に力が入る。（永里真弓）

「もっと早く照明をつけて」「（役者は）もう少し早く出よう」。あしぶえは、開会式に続いて登場し、「セロ弾きのゴーシュ」を上演する。本番を控えた30日のリハーサルでは、照明のタイミングや明るさの調整を納得するまで何度も繰り返した。

1966年に創立。団員は20代から60代の16人。演劇の制作・上演のほかに、表現能力の向上を目指した小中学校でのワークショップなど活動は演劇だけにとどまらない。米国やカナダの演劇祭で1位になるなど国際的な評価も高い。

演劇祭は4回目。まち全体を演劇で盛り上げようと、あしぶえが2001年に始めた。あしぶえと地元住民に、今回は松江市も実行委に加わった。

主催者が招待する特別公演▽子どもからお年寄りまで楽しめるファミリー公演▽世界のアマチュア劇団が参加するコンテスト公演ーがある。コンテストには、16カ国22劇団が応募し、書類とDVD審査で勝ち残った劇団に特別枠の三刀屋高（雲南市）演劇部を加えた計5劇団が競演する。

期間中は、ボランティア運営のレストランを設置。アルバホール近くの臨時駐車場（八雲小）からしいの実シアターに無料シャトルバスを運行する。JR松江駅南口からの無料バスもある。チケット完売の公演が一部ある。あしぶえ☎0852（54）2400。

中国新聞　2010年11月1日付

華やかに演劇祭開幕

6カ国11劇団 民族衣装まとい行進

松江・八雲

第4回八雲国際演劇祭が3日夕、松江市八雲町のアルバホールで開幕した。6カ国の劇団代表が民族衣装や舞台衣装を身にまとい自国の歌に合わせてにぎやかに行進し、来場者415人が国際色豊かな開会式を楽しんだ。演劇祭は7日まで行われ、同町内の施設を会場に人形劇や演劇など多彩な催しが繰り広げられる。

舞台に上がり、八雲国際演劇祭の開幕を祝う各国の劇団員ら＝松江市八雲町、アルバホール

ベルギー、ブルガリア、イタリア、ロシア、スロバキア、日本の6カ国、11劇団が参加。開会式では来場者の手拍子に合わせ、ベルギーを先頭に、各国の劇団員が客席後方から舞台に向け行進。最後に日本の4団体が登場すると、ひと際大きな拍手が起こった。

実行委員長を担うNPO法人あしぶえの園山土筆理事長は「演劇は感性をはぐくみ、各国が参加する演劇祭の開催意義は大きい。自信を持って幕を開ける」とあいさつ。開幕を記念して、あしぶえが「セロ弾きのゴーシュ」を披露した。

同市春日町の会社員吉岡理恵さん(26)は「異国情緒あふれる式典が楽しかった」と話した。

期間中、同ホールや、しいの実シアターなど八雲町内の施設を会場に、国籍の枠組みを超えて各劇団員が競演するコンテスト公演があるほか、各国の劇団が趣向を凝らしたステージを披露する。

山陰中央新報　2010年11月4日付

う。できることなら、子どもたち自身が自分のほうから劇を見たい、と思ってくれるように。

生きる姿を見せる

私の子どもの頃は、出版本が少なく、子どもが読める本は限られていた。だから、本であれば手当たり次第に読んだ。一冊の本を何回も、ときには十回近くも読んだだろうか。それらの本は、イソップか、グリムかアンデルセンか、あるいは戦争で父や母を亡くした子どもの作文集か、少し大きくなると伝記物だった。最近は、あまり読まれていない本ばかりだが、どれも、社会そのものと人間の生き方が書いてあった。伝記に登場する人物が自分の暮らす環境の中で、ひたむきに生きる姿は感動する。そしてその生き方の中には、必ずなにかしらの「工夫」や「知恵」があって、本当に面白いと思って読んだ。自分もそんな生き方をしたいと思ったものだ。劇場でもそういう体験を子どもたちにしてほしいと願っている。

「あしぶえ」では、一九八九年から二十年間、『セロ弾きのゴーシュ』を上演している。納得のいくまで何度も創り直し、海外公演も含めて一三八回上演した。あしぶえはアマチュア劇団としてスタートし、その後、プロとセミプロの混合集団となったが、地方で活動する劇団の一作品の上演数としては、この数字は決して少ないものではない。

宮沢賢治原作のこの作品を長年追究している理由のひとつは、子どもたちに、真剣に生きている人間の姿を見せたいから、と言ってもいい。楽団の中で一番へただと楽長に叱られたゴーシュが、毎晩訪ねてくる動物たちと真正面に向き合い、本人も気づかないうちにセロが熟達していく様子は、本当に楽しい。そして、ゴーシュがカッコウと対峙する場面は、圧巻だ。いまどき、人間が目を見開いて対峙する場面はそうあるものではない。劇の中で、そういった場面を子どもたちに見せていくことは、とても大切だと思っている。

できることを続ける

自分の体験をからめて文をすすめてきたが、古いエピソードが今、自分たちの活動を刺激していることを伝えたかった。あしぶえでは、前記三つのほか、学校へ出かけていっての表現授業、小・中・大学やＰＴＡ、先生たちへのコミュニケーションワークショップ、しいの実シアターでの子どものための他劇団上演、そして、演劇祭でのファミリー公演と学校公演が、子どもたちに関する活動だ。

子どもが「大人」になるために、世間に通用する社会人に育つために、演劇人として自分たちにできることを続けていくつもりだ。

【右上】朝食を提供した中学生ボランティアが料金を受け取る
【左上】「ぼてぼて茶」を準備する小学生ボランティア
【左下】2010年11月開催の「第4回八雲国際演劇祭」開会式

で多様な表現に出会って大きな刺激を受ける。十一年間のこれらの体験が人々の暮らしを確実に変えてきた。

そして、こうした大人たちの変化が、子どもたちにも大きな影響を与えている。まず、地元の中学生を中心に、演劇祭のボランティアを希望する子どもが増えてきた。主な活動は、喫茶・グッズ委員会でのグッズ販売、食事委員会での食事提供、環境委員会でのゴミ拾いや清掃、ハウス委員会でのチケットもぎりなど。昨年十一月に開催した「第四回」の演劇祭では、初めて小学生たちが「キッズレストラン」のウエイター、ウエイトレスを担当した。子どもボランティアは、開催前からおもてなしの心を育んだり、海外劇団員に対応するため簡単な英会話を練習したりするが、いざ演劇祭が始まると、「上演される劇を観たい」という。観客がわくわくしながら劇場前に列をつくっているのを見ると、今まで、劇を観たいなどと思ったこともない子どもたちが、自分たちも観たい、という。そういった自然に湧き上がってくる観劇への欲求は素晴らしい。なんとか満たしてやりたい、と思う。こういった体験が積み重なって、演劇の楽しさや重要性が理解されていく。

楽しかった学芸会もとうの昔になくなり、学校で劇を観るという機会は格段に減ってきた。近年はあらゆる予算が削減され、小学校六年間に一回も劇を観ない、という子どももめずらしくない。そういった状況の中で、なんとかして、子どもたちに生の演劇に触れる環境をつくりたいと思

えたいと、あしぶえでは、さまざまな取り組みをしてきた。例えば、開演前に、演出担当が簡単なスピーチを行っている。さまざま思いをもってやってきた観客の前だから随分気を遣うが、あらすじに触れたり、音楽について説明したり、衣裳に関心を持ってもらったりと、作品によって話す内容は異なる。すると、観客の興味と関心、注意力はぐんと増す。子どもたちの眼にも力が入る。作品をより注意深く観ることになる。

上演後は、アフタースピーチを行う。観客が理解しにくい場面があれば、さりげなく解説したり、テーマに関わることを話の中にすこし織り込んだりする。子どもの理解を促すために喋ったことが、まわりの大人の解釈を助けることもある。それによって、来場者は、あくまでも自分の力で作品を深め、納得し、満足して帰ることができる。

本番前後のこういった取り組みは、多様な観客に対応するために何十回もの試行によって、ようやく観客に喜んでもらえるスタイルができ上がった。「演劇」は、難しいもの、理屈っぽいものではなく、面白いもの、楽しいもの、何度でも観たいもの、というイメージづくりや環境づくりはとても大切だ。

「環境づくり」について、もう一つ。

私の仕事は、「演劇」が多くの人に楽しまれるだけでなく、「演劇の力」によって、感性、想像力、創造性などが暮らしの中で活かされ、更には物事の本質を見抜く「洞察力(Insight)」が涵養されていく地域を創ることだ。一九九九年から三年に一度開催している「八雲国際演劇祭」には、その目的が内包されている。

国際的な催事開催の絶対条件は、潤沢な予算、交通の利便性、会場・宿泊・食事などをまかなう複数の施設、外国語スタッフ、地域の観光・文化資源、そしてホスピタリティの六つだといわれている。だが、松江市南部の山里である八雲では、これらをすべて満たすことはできない。

その足りない部分を、住民ボランティアが中心となって企画段階から参加し、知恵と工夫で補って準備する。東奔西走してファンドレイジングに汗を流す。こんな田舎によくうこそと国内外からの観客と演劇人を歓迎する。食堂が一軒もないところに百席の臨時レストランを作って、宗教やアレルギーにも対応できる料理を提供する。言葉が通じなくても身振り手振りで気持ちが通じたときの喜びを味わう。地域の祭事に参加劇団員を招いて日本の生活文化を伝える。ホームステイで受け入れたゲストがコンテスト公演で俳優賞などを受賞する。そして、「こんな人の少ない田舎で、こんなハイレベルな演劇祭があるとは」と驚嘆する海外からの参加者の声を伝え聞く。

こういった演劇祭の継続で、四〇〇人のボランティアは自ら気づいていく。準備に徹するだけでなく、やはり演劇も観なければと。そして、原語で上演されていてもクオリティが高ければ、感動することを知る。海外作品の独創的

【右上】アメリカ、カナダで6つの国際賞を受賞した『セロ弾きのゴーシュ』
【左上】雪降る八雲では、「かさこじぞう」が作り事ではなく演じられる
【左下】劇場見学で、メーキャップを楽しむ八雲小学校の子どもたち

人が真剣に働いているところを見てもらう。劇場を大切にしているところや、心をこめて演劇を創っていることを話す。そして、演劇の楽しさや感動の大きさも伝えるようにしている。

演劇に親しむ環境づくり

私が演劇の道に進むようになったのは、川尻さんとの出会いがきっかけとなったが、小さい時からの環境によるところも大きい。

父は長く田舎の小学校に勤めていて、どういうわけか「情操教育が大事」と常々言っていた。昔のことだから教育的なものだけでなく、いわゆる旅芝居と言われるようなものも学校にやってきたが、とにかく折あるごとに、全校児童にさまざまな舞台を見せていた。校区の大人たちもお相伴に預かっていた。逆に大人のためのものを、子どもがお相伴することもあった。そこには生の魅力があった。みんなで観る満足感があった。だから、「演劇は楽しいもの」としか思っていなかった。

ところが、大人になるにつれて、一部の「新劇」の影響だろうか、演劇は難しいもの、堅苦しいものというイメージが付いてしまって、観もしないで、敬遠する人が増えてきた。上演する側も、解る人だけ解ればいい、といった驕りもなかったとは言えない。こういった一般的な見方を変

こちからハガキが届いた。国内はもちろんソ連やチェコやドイツからも。

六年生になってから、クラスの十人に呼びかけて人形劇団をつくり、小父さんの脚本を使うことにした。小父さんの本を読んで、「著作権使用料」のことは知っていたが、子どもだし、それに友だちだから、と思って気楽な気持ちで手紙を書いた。

「私たちは子どもだから、使用料は払わなくてもいいですよね」

すると、すぐに返事がきた。小さな文字でぎっしりと書いてあるそのハガキを読んで、私は震えた。

「脚本は、作家が苦しんで苦しんで書いたもの。たとえ誰であってもきちんと払わなければならない。みんながきちんと払ってもなお、日本の劇作家は貧しく生活が苦しい。おこづかいを貯めてでも払いなさい」

およそ、そんな文面だった。子どもの私は、おまわりさんが捕まえに来るのではないかというほど怖くなり、急いでお金を集めて送った。

もう五十年以上前のことだが、この出来事には、二つの要素が含まれている。

一つは、「出会いの大切さ」だ。私の場合は、「劇との出会い」というよりも「劇団との出会い」だった。この偶然の出来事から「演劇」に接することになったが、子どもを育てるとき、「演劇」との効果的な出会いをつくってやってもいいのではないか。意図的に、演出して、子どもたちがわくわくするような「演劇」との最初の出会い。大事なプレゼントを背中に隠して、「はい！」といきなり眼の前に差し出すような、そんな出会いをつくってやりたいといつも思っている。だから、子どもたちが、劇場見学でやってきたときは、どんな出会いをつくろうかと考える。シアターのステージに公演時と同じように舞台装置をセットし、照明をあて、音楽を流す。たった百席ほどの小さな木の劇場で、子どもたちは不思議な異空間の中でしばし漂う。

もう一つの要素は、子どもの時に、「演劇の可能性や重要性を伝えておく」ということだ。

川尻さんは、「子どもであっても使用料を払いなさい」と、自分の「信念」を私に突きつけた。つまり、「演劇」というものに本気で向き合っている大人がいる、ということも伝えてくれた。このとき以来、私は「演劇」をとても大切なものだと、思うようになった。

しかし、日本では「演劇」そのものが未だにマイナーだ。たまたま昨年、ある市の幹部が、「演劇なんて好きな奴がやっていること。そんなものに税金は使えない」と広言しているのを聞いたが、もしも彼が子どもだったころ、「演劇」に真剣に向き合っている大人がいたら、あるいは、演劇の重要性を話して聴かせる大人がいたら、やはり同じことを言っていただろうか、と残念に思う。

「しいの実シアター」では、見学に来た子どもたちに、大

ている。特に、「コミュニケーション力」のある若者をほしがっている。十年以上前から国際演劇祭を開催しているため、その財源確保の必要性からいろいろな企業のトップの方を訪ねていくが、異口同音に、「社員間や顧客とのコミュニケーションがうまくいかないことが大きな悩みだ」と言われる。

コミュニケーション力は、どんな企業でも、どんな分野でも、大人として生きていくためには必要不可欠のものだ。だが、核家族、共働きなどの家庭力の低下に加えて、テレビ、ゲーム機、パソコン、携帯電話などの登場で、子どもたちは、人間ではなく機械と向き合うようになった。コミュニケーション力が低下するのも当然だろう。表現授業で、地域の学校へ出掛けていって驚くのは、子どもたちは実際にはクラスの数人としか言葉を交わしていない。イメージ力も低下している。子どもの「生き方」が、弱化し退化してきた。こういった現実を危惧して、NPOなどの人たちが、さまざまな活動を展開している。

演劇でできること

「演劇」の分野で生きる私たち「NPO法人あしぶえ（劇団あしぶえ）」は、創立四十五年になる。十六年前からは、島根県松江市八雲町の丘の上に建つ松江市立劇場「しいの実シアター（一〇八席）」を拠点に活動している。

「演劇」は言うまでもなく、人と人とのコミュニケーションをさまざまな形で具現して「人間の生きる姿」を描く芸術だ。あしぶえでは、子どもたちに「人間が真摯に生きる姿」をたくさん見せたいと思っている。まずは、作品に登場する人物のさまざまな「生きる姿」を観せたいが、その前に、演劇を身近に感じてもらうための「演劇との良好な出会い」と、「演劇に親しむ環境」もつくらなければならない。

演劇との良好な出会いづくり

読書の場合、最初に出会う本が大切だと言われている。初めて出会った本に感動したとき、読書の魅力にとりつかれる。「演劇」も同じだ。演劇との最初の出会いが印象的だとその面白さに惹かれていく。

私が小学校五年生のときのこと。

図書館の本棚に並んだ「人形劇」の本。興味が湧いて手に取った。本の奥付のページに載っていた男の人の写真は、とても柔和に見えた。早く帰って読みたい、という気持ちで三冊借りて外へ出た。すると驚いたことに、今、自分の手の中にある本の著者・川尻泰司さんの劇団が、象の形をしたバスを仕立ててやってきて、人形劇を上演したのだ。なんという偶然だろう。子ども心にこの出会いは強く残った。それから私は、人形の作り方などを聞きたくて、川尻の小父さんにたびたび手紙を書き、小父さんからも旅先のあち

【報告】

しいの実シアターとあしぶえの取り組み

園山土筆 ― 島根・演出家・NPO法人あしぶえ理事長

子ども時代は大人への準備期間

子どもは、いつか大人にならなければいけない。「大人」、つまり身も心も成熟した人間だ。「世間に通用する社会人」と言ってもいい。そんなことは、誰でも解っていた。当たり前のことだった。中世や近世なら十五、六歳で大人になっていた。現代でも昭和四十年頃までは、若者が早く立派な大人になりたいと思っていた。

ところが、世の中は一変した。青年がいつまで経っても大人になれない。幼児化している。中には、大人になりたくない、という若者もいる。今のままがいいという。そのほうが楽だというわけだ。遠隔地の大学受験に親が同伴するのは、今や常識となった。合格を喜ぶ親が子の気に入るマンションを探して歩く。毎年繰り返される早春の風景だ。親が子どもへの本当の愛情を失って、生きる厳しさを教えなかったから、子にもその厳しさは伝わらない。そうして、大学で学ぶチャンスを与えられたにもかかわらず、学ぶべきことを学ばず、社会とも関わりを持たず未成熟な大人になっていく。

あしぶえの夢が実現して建てられた「しいの実シアター」

弱くなった子どもの生き方

一般社会は、もちろん「世間に通用する社会人」を求め

特定非営利活動法人あしぶえ
2010（H22）年度　事業報告

〒690-2105　島根県松江市八雲町平原481-1
TEL（0852）54-2400　FAX（0852）54-2411
ashibue@yitf.org　　http://www.yitf.org
ashibue©2011